

足立区立 郷土博物館 だより

2022 spring No.76

特集 足立区文化遺産調査

足立が残した
美の暮らしを伝える

区

内の旧家から寄せられた数々の希少な作品を対象に実施してきた足立区の文化遺産調査。その成果により明らかになった江戸絵画の名手である琳派の酒井抱一、谷派の総帥である谷文晁、その他狩野派の絵師たちの作品の数々に、美術・歴史ファンから注目が集まっています。今回はこれまでの経緯を振り返り、改めて足立区文化遺産調査の意義を検証します。



狩野素川壽信《群鶴図屏風》部分 千住・横山家蔵

1. 10年の軌跡

区

の文化遺産調査は平成23(2011)年1月、翌年度実施予定の区制80周年記念事業の準備という形でスタートし、特別展『足立の仏像』(開催年)のための調査、『千住生活史調査報告書』(以下『千住生活史』)のとりまとめ、戦前の8ミリと16ミリのフィルム映像の復元を行ない、終了となりました(第1次調査)。

ところが、『千住生活史』の成果を発表した『大千住―町の繁栄と祝祭―展(平成25・2013年)が開かれると、その反響はすさまじく、区内各地の旧家から多



区制80周年記念特別展『足立の仏像』の風景。当館ではじめての仏教美術に特化した展覧会。

足立区文化遺産調査のあゆみ

開催	名称
平成23年(2011年)	区制80周年に向けて足立区文化遺産調査(第1次)を開始。 千住の琳派展
平成24年(2012年)	区制80周年 足立の仏像展 ほか記念事業を実施。
平成25年~26年(2013~14年)	大千住展 町の繁栄と祝祭 この展覧会の後、多くの美術、文化資料が確認される。
平成27年(2015年)	文化遺産調査(第2次)開始(~現在)
平成28年(2016年)	美と知性の宝庫 足立 - 酒井抱一・谷文晁とその弟子たち -
平成29年(2017年)	千ヶ崎悌六 - 与謝野晶子を支えた足立の歌人画家 -
平成30年(2018年)	大千住 美の系譜 - 酒井抱一から岡倉天心まで -
令和元年(2019年)	初顔見世の役者絵
令和2年(2020年)	名家のかがやき展 - 近郊郷土の美と文芸 -
令和3年(2021年)	谷文晁の末裔 - 二世文一と谷派の絵師たち -

くの美術・文化資料の所在情報や調査希望が寄せられることとなりました。その結果、平成27(2015)年に調査再開(第2次調査)を決定し、現在に至っています。調査開始から10年。既に3000点を超える貴重な資料が見出されました。現在、調査対象となっている資料群約50のうち、既に調査が終了したのは12件。調査継続中の今なお次々と調査依頼が寄せられ、うれしい悲鳴を上げています。

調査開始前には展覧会が連続開催できるような足立区固有の多彩な美術や文化の名品が、区内に眠っていると、このこと自体、想像もつきませんでした。美術専門家た

ちの間ではいつのまにか、「足立区は上質で未紹介の美術文化資料が豊富に蓄積された地域」とのイメージが定着しつつあるほどです。「たかが10年、されど10年」です。

千住の琳派

文化遺産調査の大きなエンジンとなったのは平成23年春に開催された『千住の琳派』展でした。足立、千住在住の琳派絵師の存在を明らかにした展覧会で、当博物館に美術展の流れを生み出す契機となっただけでなく、「千住の琳派」という専門用語を定着させることにもなりました。

2. 調査から展覧会まで

資料の確認と搬出

資料についてお知らせいただいております。展覧会出展までのながれをご紹介します。

資

長期間（数十年）にわたって保管されていた場所から博物館への搬出は、一日から数日の間、資料提供をお申し出いただいたお宅のご協力をお願いしながら進めます。まさに様々な資料との出会いの瞬間です。この出会いが10年絶えまなく続いています。



所蔵先での調査と搬出の梱包作業

熟覧調査 正体を見極める

博物館に到着すると、最初に汚れの除去、防虫防カビのくん蒸処理を行い、いよいよ資料の調査に入ります。

はじめに採寸などの記録を行って、いよいよ「熟覧」を行います。「熟覧」とは、調査研究を行うため資料をよく確認することです。博物館職員と専門家が一緒に資料の状態を確かめ、真筆か写しか、その成り立ちの推定など、資料の正体をじっくりと見極めていきます。一見して終わる作業ではなく、例えば六曲一双の屏風のような大作の場合、点検箇所は100か所以上、数時間にも及びます。

よく「調査結果はどのくらいで出るの?」とご質問をいただき、「時間がかかる」とお伝えすると、不思議に思われる方も多いのですが、専門家が一見して価格を判断するテレビ番組の様にいきません。番組は放送時間の都合上、事前調査の部分を割愛しているのです。



熟覧する武蔵野美術大学教授、玉蟲敏子先生(手前)

修復

本の絵画は絹や和紙等、繊細な素材で出来ているため、耐久性には限界があります。例えば掛軸は本来、二十四季節や七十二候に合わせて、長くて十日前後だけ床の間に飾って楽しむものでした。

確認時に表具や本紙と台紙の接着剤の劣化が認められると破損を防止するため、修復が必要となります。古画修復専門の方のお力を借りて、展覧会や後世へ伝えるため、表具や本紙の折れなどを直します。

修復時に本紙を台紙から外すとき、台紙に用いられた反故紙から、制作年代や、制作地域がしばしば判明しますので、修復も研究調査の一工程です。



修復のようす

展覧会で多くの人に見てもらおう

調査での確認、熟覧研究、保存処理を経て、はじめて展覧会への出展準備が整います。足立区のように初公開資料が多い展覧会では、歴史や美術の研究者、大学教授、他の美術館・博物館の学芸員、古美術商、修復家、そして何より多くのお客様からの率直なご意見や、未公表の作品情報、使い方の証言、感想などたくさんの方が集まり、研究内容が深化することが期待できます。

調

また当区の場合、展覧会場でスタッフにお声がけいただいたことがきっかけとなり、新たな資料調査が始まることも多々ありました。つまり展覧会は、単に普及という役割にとどまらない、様々な意味合いを含んだ一大イベントなのです。



修復し公開した建部巢光の大作屏風

3. ほかに例を見ない足立の『おたから』

い

ま足立区の文化遺産調査は、専門家から「ほかに例を見ない素晴らしい成果をあげている」と高い評価をいただいています。それは調査開始から秀逸な遺産が集まりつづけ、「足立区は美と知性の宝庫」という見方が固まりつつあるからです。それでは、そもそも、なぜ、足立区は「美と知性の宝庫」たりえたのでしょうか？その理由は次の三点に集約できます。

①一つ目は足立区に正当な画系を受け継いだ村越其栄や船津文淵ら作者がいたこと

彼らは江戸の絵師たちと親交します。合作も生まれ、代表例の「関屋里元追善集」(名倉家蔵)は、江戸の其一、文晁、さらに浮世絵師の歌川国芳と、千住の絵師、坂川屋鯉隠そして江北の谷派絵師、船津文淵の五名が競うように絵を添えた名品です。かつて古記録研究者が文献で名前を伝えてはいたものの、原品が確認された



「関屋里元追善集」より歌川国芳「江戸玩具図」

のは初めてで、こうした希少性ある作品の発見が続いています。

②千住の名倉家や中央本町の日比谷家など、作品の良さを理解した支援者がいたこと

支援者自身も文芸の理解者で、名倉家の初代直賢は鈴木其一らと「狂歌草芽集」という狂歌集を出したほどです。作者からの手紙、作者と支援者との交流の記念をうたった墨書や絵画を見ると、支援者たちが文芸の深い理解者であったことが判ります。

③作品、記録、そして暮らしぶり等を散逸させず守り伝えた家々があったこと

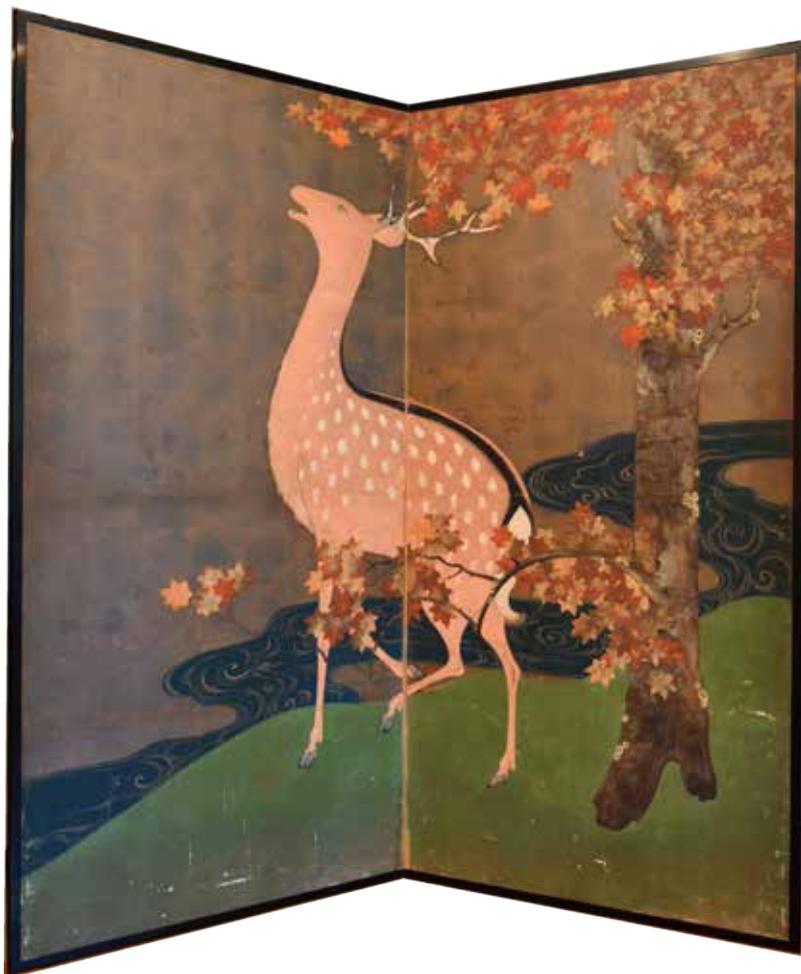
中央本町の日比谷家は文淵に屋敷の飾りを依頼、文淵による琳派風の「四季草花図小襖」が伝来しています。日比谷家と文淵とのやりとりは船津家の記録に、屋敷のどこで利用されたのかは、日比谷家の絵図に残っていました。こうした作品の背景情報は、市場で入手する作品からは失われていることが多い貴重な情報です。

また、文淵は谷文晁の門人ですが、本作に見られる金箔地に描かれた草花という琳派の作風はどこに由来しているのかという疑問も、船津文淵が琳派絵師、鈴木其一と親しく交流していたことを表す彼の日記から、影響の所在が浮かび上がったのです。

足立の文化遺産はしばしば都内の美術関連施設「国宝重文展示室」(都内)や著名美術館での作品公開や、高名な美術雑誌やテレビ番組に取り上げられる機会が増えました。足立固有の『おたから』の知名度が、徐々に高まり始めています。



船津文淵《四季草花図》小襖（足立区中央本町・日比谷二郎氏蔵）



多くの雑誌、新聞、テレビ、WEB に登場した作品。村越其栄《紅葉鹿図屏風》千住・名倉家蔵。



見守って
いてにや

郷土博物館では、多くの方々のご理解とご協力により集まった美術・文化資料を後世に伝えるべく、最善の方法を常に模索し続けています。新出資料も多く、いまだ調査中の未公開資料も数多く抱えています。足立区の文化遺産調査はまだ続きます。今後の研究成果に引き続きご注目ください。

未来のあなたにも みてもらえますように！

博物館とみんなで作ったたからもの



足立区立郷土博物館だより 76号



令和4(2022)年3月発行

足立区立郷土博物館 ADACHI CITY MUSEUM

〒120-0001 東京都足立区大谷田5-20-1

☎03-3620-9393 / e-mail hakubutsukan@city.adachi.tokyo.jp

URL = <https://www.city.adachi.tokyo.jp/hakubutsukan/>